

# 「由緒沿革誌其ノ四」の翻刻と平安義校

— 『平安義会資料』『旧桜橘財団関係資料』の紹介 (二) —  
下 川 雅 弘\*

Introduction to Heian-gikai Siryo (the Historical Materials of the Heian-gikai) and Ohkitsu-zaidan Siryo (the Historical Materials of the Ohkitsu-zaidan) for the Study of Kyoto-kanke-shizoku (Ⅱ)

Masahiro SHIMOKAWA\*

## Abstract

The term Kyoto-kanke-shizoku refers to the low-level functionaries who served in the Imperial Court until 1869. They became unemployed and impoverished as a result of the Meiji Restoration. The organizations Heian-gikai and Kyoto-Ohkitsu-zaidan were founded to support them. Heian-gikai Siryo (the Historical Materials of the Heian-gikai) and Ohkitsu-zaidan Siryo (the Historical Materials of the Ohkitsu-zaidan) are the materials handed down from generation to generation in these organizations. In 2016, these materials were donated to the Kyoto Institute, Library and Archives. This text was written to introduce them for being used in the study on the Kyoto-kanke-shizoku.

## はじめに

本稿は、近世以前において朝廷に出仕していた官家士族について、その近代以降の動向の解明に資するため、京都府立京都学・歴史館所蔵『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の一部を、逐次翻刻・紹介することを目的としている。<sup>①</sup>その(二)となる今回は、同史料群のなかから、とくに平安義校に関する史料を取り扱う。

平安義校とは、明治十六年(一八八三)十月に下賜された年二千四百円の恩賜金などを元手として、官家士族の子弟を教育する目的で設立された学校である。平安義校については、山下奈津美氏と小林丈広氏によって研究がなされているので、まずはその成果を整理する。

山下氏は、明治十五年(一八八二)、官家士族で東京在住の伊丹重賢・尾崎三良・桜井能監が、三条実美・岩倉具視宛に、学校設立とそれに伴う資金援助を求める請願書を提出し、このなかで洋学に傾いた維新後の教育制度に対する批判がなされていることや、平安義校の生徒らは皇典・漢籍・経史・文章のほかは武術を修めたとする義校規則の一部などを紹介している。<sup>②</sup>なお、こうした山下氏の研究は、官家士族の団体である平安義会が、その事歴と朝恩を伝えるため、明治四十一年(一九〇八)十一月に編纂した『平安義会事歴』<sup>③</sup>の記事に依拠している。小林氏は、東京遷都に反対する国学者らが、幕末に御所に設けられていた学習院の後身として、明治二年(一八六九)十二月に、国学に固執した「仮大学校」を新政府の支持のないまま京都に開講したが、

翌年八月には廃止となったことを紹介するとともに、明治十七年(一八八四)はじめに開校した平安義校は、皇典・漢籍・経史・武術などを教科内容としており、かつての「仮大学校」を彷彿とさせるような、きわめて復古主義的な色彩の強い学校であったと評価している。<sup>④</sup>また、『尾崎三良自叙略伝』<sup>⑤</sup>の記事に依拠し、伊丹らが明治十五年の請願書において、明治四十五年までは万事に大義名分が通底していたが、それ以降は洋学者の浅劣未熟な見識により欧米の皮相を説く風潮が生じたと嘆いていることや、明治十六年(一八八三)二月に、官家士族で京都在住の中川武俊が、維新以後の教育は欧米一辺倒で「正学」をおろそかにしており、本来の教育機関が必要であると、岩倉宛の書簡(『岩倉具視関係文書』)で主張していることなどが紹介されている。

さらに、小林氏は、官家士族出身の実業家浜岡光哲が、平安義校について「当初岩倉右府公は、京都士族の子弟に尽く軍事教育を施し、以て藩閥政府の武力に対抗し、之を禁衛軍として宮中に直属せしめ、薩長の専恣を控制せむとするの意図を有したる」(『浜岡光哲翁七十七年史』)と証言していたことや、明治十九年(一八八六)頃に宮内省を去った官家士族の西尾為忠が、その後平安義校の教頭として迎えられ、明治二十一年(一八八八)九月二日付の『日出新聞』に、「西尾氏は支那学を主張して万事古風を脱せず、故に他の教員等は斯る教頭を戴き居りては充分欧米の新学問を教育するに妨げあり」とあることなど、興味深い記事も引用している。

さて、小林丈広氏は、『岩倉具視関係文書』『浜岡光哲翁七十七年史』『日出新聞』といったさまざまな史料を駆使して平安義校を考察して

いるが、これら以外についてはおもに『尾崎三良自叙略伝』に依拠している。この『尾崎三良自叙略伝』の平安義校等に関する記事の多くは、山下奈津美氏が依拠した『平安義会事歴』を参照して叙述されたものである。つまり、先行研究で明らかにされた平安義校の概要部分については、いずれも『平安義会事歴』の記事がおもな典拠ということになる。そこで、『平安義会事歴』に掲載されている「平安義校規則」と「建校大意」のそれぞれ一部を引用・紹介しておく。

#### 平安義校規則

第一條 本校ハ旧官家士族ノ子弟ヲ教育シ、専ラ忠孝節義ノ道ヲ講明シ、旁ラ開物成務ノ学ヲ研究セシムル所トス、

第二條 本校ハ左ノ役員ヲ置ク、

校長 一人 親王ヲ推戴ス（実行ニ至ラス）

理事 二人 官家士中ヨリ選拔ス

主計 二人

主記 二人

以上事務員

教長 一人 碩学鴻儒ヲ聘ス

助教 二人 学識品行アルモノヲ選拔ス

塾頭 二人 生徒中学識品行アルモノヲ選拔ス

教生 八人 同上

以上教員

第三條 生徒ハ滿十二年以上廿五年以下ノ者トシ、入塾通学ハ

各々其望ニ任ス、但シ講筵ニ出席スルハ年齢ヲ限ラス、  
第四條 教授科目ハ大略左ノ如シ、

皇典 漢籍 經史 文章

但シ書目ハ塾則ヲ以テ之ヲ定ム、

歌詩 習字 算術ハ放課時間随意ニ学ハシムルモノトス、  
第五條 運動ノ為メ鎗劍柔術等ヲ試業スルモノトス、（後略）

本義校建設ノ際、建校大意ヲ官家士族一般ニ發布シタリ、

#### 建校大意

（前略）平安官家士族ノ 朝家ニ於ケル親昵此ノ如ク、而シテ其子弟纔ニ小学通常ノ学課ヲ卒業シテ自ラ足レリトシ、自ラ安シ奮發以テ 国家ノ用ニ供スルノ志無クシテ可ナランヤ、且天下ノ學術多端ニシテ講学者或ハ異教ニ浸淫シ、我 天神地祇ヲ輕スルアリ、或ハ夫ノ君主ヲ易ル奕棋ノ若キヲ見テ当然ノ道トスルアリ、或ハ事理ノ当否ヲ問ハズ、時勢ノ順逆ヲ論セス、徒ニ事例ヲ海外ニ徴シ、一二之ヲ模倣シテ、我邦ニ行ハント欲スルアリ、是レ皆 国体ニ通セズ、義理ヲ講ゼサルニ因ルナリ、孰カ復タ此輩ノ能ク天下ヲ紊乱セザルヲ保ンヤ、今此校ヲ設立スルヤ、専ラ国書ヲ以テ 国体ヲ通知セシメ、儒学ヲ以テ義理ヲ講究セシムルハ、生徒ヲシテ義理ヲ失ハズ、 国体ヲ誤ラズ、 国家ノ用ニ供セシメント欲スルナリ、（後略）

明治十七年一月

平安義校

是レ有栖川宮及三條公御訓諭ノ主旨ヲ敷演シタルモノニシテ、専

ラ忠孝節義ノ道ヲ以テ励精薫陶シタリ、当時或ハ固陋ノ弊ニ陥ラサル哉ノ論モアリシガ、明治二十三年ニ至リ、万古不拔ノ教育勅語ヲ煥發セラレタリ、之レヲ捧読スルニ至ツテ義校ノ精神ノ誤ラサルコトヲ認メ、大ニ人意ヲ強フスルコトヲ得タリ、

『平安義会事歴』所収の「平安義校規則」によると、平安義校は「忠孝節義ノ道ヲ講明シ、旁ヲ開物成務ノ学ヲ研究セシムル所」であり、教授科目は「皇典 漢籍 經史 文章」「歌詩 習字 算術」は随意、このほかに「鎗劍柔術等ヲ試業スル」とされている。また、「建校大意」では、「国書ヲ以テ 国体ヲ通知セシメ、儒学ヲ以テ義理ヲ講究セシムル」とあるとおり、たしかに開校当初の平安義校は、官家士族の子弟にきわめて復古主義的な教育を施そうとしていたようである。

ただし、小林丈広氏が引用した明治二十一年（一八八八）の『日出新聞』の記事に「斯る教頭（西尾）を戴き居りては充分欧米の新学問を教育するに妨げあり」とあるように、この頃の平安義校は復古主義的な教育から脱しようとしていた可能性がある。そもそも『平安義会事歴』は、平安義会第二代会長の尾崎三良らが、同会（平安義校も含む）の事歴と朝恩を会員に周知するとともに、これを将来にわたって伝えていく目的で、明治四十一年（一九〇八）に刊行した後世の編纂物であるため、その内容をそのまま鵜呑みにするわけにはいかない。

そこで、本稿では、平安義校に関する明治十六年（一八八三）から明治三十五年（一九〇二）の史料を綴込んで簿冊とした、『平安義会資料』所収「由緒沿革誌其ノ四 平安義校ニ関スル書類」の一部を翻刻・

紹介し、『平安義会事歴』では知り得ない平安義校のあらたな情報を提供したい。

## 一 史料の解題

（一）『平安義会資料』所収「由緒沿革誌其ノ四 平安義校ニ関スル書類」の構成と解題

まずは、『平安義会資料』所収「由緒沿革誌其ノ四 平安義校ニ関スル書類」の冒頭に記載された目録を引用する。

### 目録

- 壺 平安義校設立ニ関スル件
- 貳 平安義校規則
- 参 同教授要旨及細目学課表日課表
- 四 同書籍縦覧室規則
- 五 生徒心得
- 六 開校式
- 七 改正請求主意書
- 八 建議書
- 九 平安義校職制并教員心得
- 壺〇 同試験
- 壺壺 同家屋建具明細書
- 壺貳 同収支決算書

これらに綴られた膨大な書類のなかから、本稿では、(一)「平安義校設立方法」、(二)「明治元年復古ノ際ヨリ同十三年迄ノ学校ニ関スル布達ノ控」、(三)「平安義校規則」、(四)「平安義校改正請求主意書」を翻刻・紹介したい。それぞれの史料についての解題は、以下の通りである。

(一)の「平安義校設立方法」は、「沓 平安義校設立ニ関スル件」の最初に綴られた書類である。明治十六年(一八八三)十月に、年二千四百円の恩賜や旧二条邸の拝借が内決したことを受け、平安義校の開校に向けて、その設立方法の概要がまとめられている。

(二)の「明治元年復古ノ際ヨリ同十三年迄ノ学校ニ関スル布達ノ控」は、「沓 平安義校設立ニ関スル件」に綴られた書類の一つである。この書類にはとくに表題は付けられていないが、その内容から便宜上「明治元年復古ノ際ヨリ同十三年迄ノ学校ニ関スル布達ノ控」という史料名を付けた。本史料には、明治四年(一八七二)十二月の文部省布達によって、日本の教育が皇学から洋学を主体とする方針に転換されたとある。その前半では明治元年(一八六八)から明治四年に至る学校に関する布達等を引用した上で、皇道・皇学にとって見るべき箇所には朱書きの○を付し、後半では明治四年から明治十三年(一八八〇)に至る学校に関する布達等を引用した上で、洋学の弊害が感じられる箇所には朱書きの△を付している。明治十六年十月より平安義校の開校を目指すなかで、明治維新以後の学校に関する布達等を整理・検討した

史料と考えられる。

(三)の「平安義校規則」は、「式 平安義校規則」の最初に綴られた書類である。「式 平安義校規則」には、これを含めて七点の「平安義校規則」が収められている。なお「沓 平安義校設立ニ関スル件」にも、「平安義校規則稿」が一点綴られているが、これらの年次や内容については、次節で検討・紹介する。

(四)の「平安義校改正請求主意書」は、「七 改正請求主意書」に綴られた唯一の書類である。この書類は、明治十八年(一八八五)八月に、京都府の官吏で平安義校理事の一人である中川武俊が、東京の柳原前光・伊丹重賢・尾崎三良・桜井能監に宛てたもので、平安義校の諸規則等の改正を強く求めている。

(二)「平安義校規則」の年次比定

『平安義会資料』所収「由緒沿革誌 其ノ四 平安義校ニ関スル書類」の「式 平安義校規則」には、七点の「平安義校規則」が綴られている。また、「沓 平安義校設立ニ関スル件」の最後には、「平安義校規則稿」一点が収められている。まずはこれらを綴られている順に(Ⅰ)から(Ⅷ)として列記し、それぞれの一部(教育の目的や学科など)を翻刻した。

(Ⅰ)「明治十六年十月 平安義校規則稿」

第一條 本校ハ旧官家士族ノ子弟ヲ教育シ、忠孝節義ノ道ヲ講明シ、開物成務ノ業ヲ研究セシムル所トス、

〔Ⅱ〕「平安義校規則」

第一條 本校ハ旧官家士族ノ子弟ヲ教養シ、忠孝節義ノ道ヲ講明シ、開物成務ノ業ヲ研究スル所トス、

第十一條 学科ハ修身、歴史、文章、習字、算術、体操、唱歌ノ七課トシ、其卒業全学期ヲ八年ト定メ、本科ハ六年高等科ハ二年トス

（学科課程表、  
巻尾ニ附ス）

但高等科ハ法令学ヲ加フ、

〔Ⅲ〕「明治廿三年九月改正 平安義校規則」

第一條 本校ハ陸海軍学校及高等中学校ニ入学スル生徒ヲ養成シ、徒ニ生徒ノ智育ノミナラス、大ニ徳育体育ニ注意シ、国家有用ノ才ヲ陶冶センコトヲ期ス、

第六條 本校ニ於テ教授スル学科ハ、道義、体操、国文、漢文、地理、歴史、習字、英語、数学、博物、物理、化学、図画トス、

〔Ⅳ〕「明治十九年九月 平安義校規則」

第壹條 本校ハ旧官家ノ子弟ヲシテ、行誼ヲ修整シ、文学武伎ヲ研究セシメ、生徒中体格強壯ナルモノハ、陸軍士官生徒ノ試験ニ応シ、体格健全ナラサルモノハ、各高等学校ニ入学スルノ準備ヲ為サシムルノ所トス、

但、旧官家ニ非サル士民ノ子弟ニモ入学ヲ許可スルコトアルベシ、  
教科

第貳條 本校ノ教科ヲ分ツテ本科及ヒ予科ノ二種トス、

第參條 予科ノ課程ヲ二ケ年トシ、本科ヲ五ケ年半トス、

第四條 予科ハ修身、読書、作文、英語、地理、歴史、算数、博物、物理、習字、図画及ヒ体操トス、

第五條 本科ハ倫理、国語、漢文、英語、独逸語、地理、歴史、算数、代数、幾何、三角、博物、々理、化学、簿記、習字、図画及ヒ体操トス、

但体操ハ操練、擊劍及ヒ輕体操トシ、課余ニ水泳、馬術、弓術ヲ習ハシム、

第六條 本科ノ各学科ヲ終リタル後、其志望ニ由リ半学期其学科ヲ温習セシム、

〔Ⅴ〕「平安義校規則」

第壹條 本校ハ旧官家ノ子弟ヲ教育シ、忠孝節義ノ道ヲ講明シ、文学武伎ヲ研究スル所ロトス、

第三條 教則ヲ分ツテ本科副科ノ二科トス、

本科生徒ハ陸軍士官タルヲ志願スル者ニシテ、満十八年以下満十四年以上ヲ限体格学力試験ノ上、本校初級以上ニ適スル者ヲ入塾セシム、

但学期内故ナク退校スルヲ許サス、

副科生徒ハ二十五年以下ニシテ、小学中等科卒業已上若クハ之ニ相当スル学力ヲ有スル者トス、入塾通学ハ各其望ニ任カス、

但入学ノ節、従前ノ卒業証ヲ有スル者ハ試験ヲ要セス之ヲ許シ、其証状ナキモノハ従前得業ノ書目ニ就キ試験シテ、之ヲ許否スル



モノトス、

第十一條 学科ハ修身、歴史、文章、習字、算術、図画、体操ノ七課トシ、其卒業全学期ヲ四年トス、

但副科生徒ハ図画課及体操課中、歩兵、操練等ノ業ヲ除ク外ハ修業セシムヘシ、

〔Ⅵ〕「平安義校規則」

内容はすべて（Ⅴ）に同じ

〔Ⅶ〕「平安義校規則」

内容はすべて（Ⅱ）に同じ

ただし表紙に以下の朱書きあり

明治十七年四月、松井氏来校演説ニ対シ、本校規則改正案ヲ業シ、中川武俊氏東上ノ幸便ニ委托シ、伊丹、尾崎両ノ審議ニ付セシム副本也、

〔Ⅷ〕「平安義校規則」

内容はすべて（Ⅱ）に同じ

さて、（Ⅱ）（Ⅴ）（Ⅵ）（Ⅶ）（Ⅷ）の「平安義校規則」には、その年次が記されていないため、まずはこれらの年次を比定したい。

（Ⅰ）と（Ⅱ）について、教育の目的を規定した第一条に注目すると、（Ⅰ）と（Ⅱ）ではその条文がほぼ同じであるので、（Ⅱ）は（Ⅰ）の「明治十六年十月 平安義校規則稿」に基づいて成立した最初の「平安義

校規則」であり、平安義校が開校したとされる明治十七年（一八八四）初め以前には成立していたものと考えられる。したがって、（Ⅱ）とまったく同内容の（Ⅶ）（Ⅷ）も、開校当初の「平安義校規則」である。

つぎにこの（Ⅶ）に注目すると、開校当初の「平安義校規則」の全編にわたって朱書きの改正案が記入されており、その文言が（Ⅴ）に酷似している。（Ⅶ）の表紙に「明治十七年四月、松井氏来校演説ニ対シ、本校規則改正案ヲ業シ、中川武俊氏東上ノ幸便ニ委托シ、伊丹、尾崎両ノ審議ニ付セシム副本也」とあるとおり、（Ⅴ）は明治十七年四月以降に伊丹重賢・尾崎三良らの審議を経て改正された「平安義校規則」と考えられる。

以上の検討を踏まえて、（Ⅰ）から（Ⅷ）の「平安義校規則（稿を含む）」を古い順に並べると、つぎのようになる。

（Ⅰ）「明治十六年十月 平安義校規則稿」

（Ⅱ）（Ⅶ）（Ⅷ）「明治十六年十月から明治十七年初め頃」平安義校規則」

（Ⅴ）（Ⅵ）「明治十七年四月以降改正」平安義校規則」

（Ⅳ）「明治十九年九月改正 平安義校規則」

（Ⅲ）「明治廿三年九月改正 平安義校規則」

本稿では、開校当初の「平安義校規則」である（Ⅱ）のみを、全編にわたって翻刻することとした。なお、翻刻に当たっては、原則として旧字を新字に改めている。

## 二 史料の翻刻

### (一)「平安義校設立方法」の翻刻

(表紙)  
一

#### 平安義校設立方法

#### 平安義<sup>(ママ)</sup>學設立方法

##### 第一款

平安校設立ノ目的ハ、和漢ノ文学ヲ講究シ、旧官家士族ノ子弟ヲ教育シ、忠孝節義ヲ磨礪シ、以テ風教ヲ維持スルニ在リ、

##### 第二款

平安義校ト称シ、京都上京区第十壹組常磐井殿町宮内省御用邸ヲ拝借シテ本校ト為シ、塾舎同区第十組玄武町九番戸誘導社内ニ置ク、

##### 第三款 学科課程教用書

別紙課程表ニ詳記ス、

##### 第四款 学期授業時限及日限

同上、

##### 第五款 試業及休日

別冊校則ニ詳記ス、

##### 第六款 入学及塾則

同上、

##### 第七款 生徒員数及入学生徒学力

生徒ノ員数ハ、定員ナシ、入学生徒ノ学力ハ、校則ニ在リ、

##### 第八款 教員職務及其学力

教員<sup>(ハシ)</sup>□、賓師、教頭、教師、助教師トシ、其職務ハ、經書、歴史、文章已下ヲ教授シ、学力ハ、和漢ノ經史ニ通シ、詩文ヲ能クスルモノトス、而ルニ中ニ就テ専ラ經義ヲ講スルアリ、博ク史伝ヲ究ムルアリ、深ク国典ニ通スルアリ、又書学、数学、劍術、柔術、唱歌ニ達スルアリ、各其長スル所ヲ以テ教員ニ充ツ、

##### 第九款 生徒訓誡

校則中別項之生徒心得ナル者はナリ、

##### 第十款 生徒授業料

通学入塾ヲ論セス、無月謝トス、

##### 第十一款 敷地及建坪

本校敷地ハ、貳千〇三坪八合、建坪ハ、百貳拾坪余、此内<sup>上藏六坪、  
敷地十五坪</sup>、塾舎敷地ハ、九百五拾三坪貳合五夕ニシテ、建坪ハ、百八拾七坪五合五夕ナリ、

##### 第十二款 經費収支概算

本校經費ハ、宮内省ヨリ年々賜ル所ノ金二千四百円ヲ以テ原資トシ、有志者ノ義捐金ヲ以テ補支ス、



(二)「明治元年復古ノ際ヨリ同十三年迄ノ学校ニ関スル布達ノ控」の  
翻刻

〔明治元年復古ノ際ヨリ同四年迄、学校ニ於テ大道ノ講究御振起相  
成候布達ヲ節取シ、眼目ノ処ニ朱〇ヲ加へ、御目安ニ相備候也、〕

明治元年戊辰六月廿九日

大政御一新大義名分ヲ明ニシ、人才御生育被為□□ 付鎮台府ニ於  
テ、昌平学校御興復被仰出、節略下同、

同九月十六日

大学校御取建被遊、天下ノ人才ヲ集、文武共盛被為備度思食ヲ以テ、  
先皇学所漢学所仮設被仰出就テハ、兼テ御布令ノ通、先宮堂上及非  
藏人諸官人等、望ニ随入学可致候、三十未滿小番被免ノ輩ハ、成丈  
勤学致候様可心掛旨、被仰出候事、節略、

規則

- 一 国体ヲ弁シ、名分ヲ正スヘキ事、
- 一 漢土、西洋ノ学ハ、共ニ皇道ノ羽翼タル事、下略、

同十月二十日、東京在留ノ諸侯へ御沙汰

毎月五ノ日、小御所ニ臨、御資治通鑑聴講被仰付候ニ付、東京在留  
ノ諸侯極老幼若ノ外、有志ノ輩御筵ニ陪侍シ、研究可致候、若不審  
疑惑等有之候ハ、其坐ニ於テ質問商量不苦候、就テハ本月廿五日、  
漢高祖紀ヨリ御開業ニ相成候ニ付、銘々書卷持参可有之候事、

但学業未熟ニ候共、有志ノ面々ハ出坐可致、其志無之輩ハ来ル廿  
二日迄ニ姓名書求調差出可申事、

同十二月十日

来十四日、皇学所開講被仰出候間、宮堂上及非藏人諸官人ニ至迄、  
入学勉励可致候、中略、近来皇国ノ学相衰へ、外国へ対シ候テモ不  
都合ニ付、今般更ニ皇国学威大ニ振起被遊度思召ニ候間、各御一新  
之御趣意ハ奉戴シ、異日国家ノ大用ニ相立候様、一同奮発勉強可致  
旨、御沙汰候事、

- 一 御開講当日、卯半刻参集可有之事、
- 一 衣体ノ儀、堂上狩衣直垂、地下麻上下之事、

規則

- 一 入学当日、可為正服事、節略、
- 一 毎年正月、御開講日

古事記表文 講義

二七 古事記 三八 令義解

四九 続日本記 五十 万葉集

二年己巳四月十八日

昌平学校講義、毎月十日、十五日、廿五日、

但大学ヨリ開講候事、

右之定日、在東京之公卿諸侯中下太夫諸官人非藏人輩以下、勝手ニ  
出席可致事、

三年庚午二月大学 大学規則

学体

道ノ体タル物トシテ在ラサルナリ、時トシテ存セサルナシ、其理ハ  
則綱常其事ハ、則政刑学校ハ斯道ヲ講シ、実用ヲ天下国家ニ施ス所



人々其家業ヲ昌ンニシ、是ヲ能ク保ツ所以ノ者ハ、男女ヲ論セス、各其職分ヲ知ルニヨレリ、今男子ノ學校ノ設ケアレトモ、女子ノ教ハ未タ備ラス、故ニ今般西洋ノ女教師ヲ雇ヒ、共立ノ女學ヲ相開、華族ヨリ平民ニ至ル迄、入校差許云々、

但當分莫學事、下略、

壬申三月十四日、文部省布達（私學校迄モ洋風ニ變スル之布達）、

従前私塾ニ於テ生徒教育之儀ハ、官ヨリ指構不致候処、元來人民教育之道ニ於テハ、公私ニ因リ其差別無之筈ニ付、自今私塾ヲ開候者ハ、前以教育ノ方法等當省ヘ伺出免許ヲ受候上、開塾可致云々、

壬申五月廿九日、文部省ヨリ諸省ヘ廻達、

今般東京ニ於テ師範學校ヲ開キ候、師範學校ハ小学ノ師範タル可者ヲ教導スル処ナリ、全休人ノ學問ハ身ヲ保ツノ基礎ニシテ、順序階級ヲ誤ラス、才能技芸ヲ成長スルニアリ、依テ益々小学ヲ開キ、人々ヲシテ務メテ學ニ就カシムルノ御趣意ニ候処、差向小学ノ師範タルヘキ人ヲ養ヒ候儀、第一ノ急務ニ有之、且外国ニ於テモ師範教育所ノ設ケ有之ニヨリ、其意ヲ取リ外国教師ヲ雇ヒ、彼国小学ノ規則ヲ取テ新ニ我国小学課業ノ順序ヲ定メ、彼ノ成法ニ因テ我教則ヲ立テ、以テ他日小学師範人ヲ得ント欲ス、今立校ノ規則ヲ定ムル事左ノ如シ、

- 一 外国人一人ヲ雇ヒ、之ヲ教師トスル事、中略
- 一 教師二十四人ノ生徒ニ教授スルハ、一切外国小学ノ規則ヲ以テスル事、

十三年一月廿九日、文部省職制、  
卿一人

全国教育ノ事務ヲ統接シ、道德智識ノ上進ヲ贊道ス、  
同十二月二日

文部省ハ全国教育ニ関スル事務ヲ管理スルノ所ニシテ云々、  
卿一人部下ノ官員ヲ統率シテ、主管百般ノ事務ヲ總理ス、

（三）「平安義校規則」の翻刻

（表紙）

平安義校規則

平安義校規則

第一條 本校ハ旧官家士族ノ子弟ヲ教養シ、忠孝節義ノ道ヲ講明シ、

開物成務ノ業ヲ研究スル所トス、

第二條 校中左ノ職員ヲ置ク、

校長

理事

主計

主記

以上事務員

賓師

教頭

教師

助教師

塾頭

以上教員

第三條 生徒ハ二十五年以下ニシテ小学中等科卒業已上、若クハ之ニ相当スル学力ヲ有スル者トス、入塾通学ハ各其望ニ任カス、

但シ入学ノ節、従前ノ卒業証ヲ有スル者ハ、試験ヲ要セス之ヲ許シ、其証狀ナキモノハ、従前得業ノ書目ニ就キ試験シテ、之ヲ許否スルモノトス、

第四條 入学ハ毎年三月九月兩度ヲ以テ定期トス、

但シ時宜ニ依リ定期外ニ入学ヲ許スコトアルベシ、

第五條 入学セント欲スル者ハ、第一号書式ニ依リ履歷書ヲ添へ、理事ニ申出ベシ、其入学ヲ許可スル時ハ、第二号書式ノ許可狀ヲ附与シ、第三号書式ノ保証狀差出サシム、

第六條 入塾通学ヲ問ハス、総テ受業料ヲ納ムルニ及ハス、

第七條 入塾生ハ食費トシテ毎月金貳円五拾錢ヲ納ムベシ、

但物価ノ高低ニ依リ増減スルコトアルベシ、

第八條 入塾生貧窶ニシテ前條ノ食費ヲ納ムルコト能ハザル事情アルモノ、若干名ニ限校費ヲ以テ其食費ノ半額、若クハ全額ヲ賄フコトアルベシ、

第九條 入塾生其品行学芸ニ於テ前途見込アル者、若干名ニ限校費ヲ

以テ一切ノ学資ヲ支弁シ、又ハ其食費ノ全額、若クハ半額ヲ賄フコトアルベシ、

第十條 校費ヲ受クル生徒事故ナクシテ退校シ、又ハ放校ノ罰ヲ受クル時ハ、其校費ハ悉皆之ヲ償還セシム可シ、

第十一條 学科ハ修身、歴史、文章、習字、算術、体操、唱歌ノ七課トシ、其卒業全学期ヲ八年ト定メ、本科ハ六年高等科ハ二年トス  
(学科課程表、  
巻尾ニ附ス)

但高等科ハ法令学ヲ加フ、

第十二條 生徒ハ全期ニ関セス進歩ニ從ヒ加級スルモノトシ、総テ本科ヲ卒ヘサルモノハ、退校ヲ許サズ、

第十三條 学年ハ九月一日ニ始マリ七月三十一日ニ終ル、

第十四條 前学期ハ九月一日ヨリ二月十五日ニ至リ、後学期ハ二月十六日ヨリ七月三十一日ニ至ル、

第十五條 休業日ハ左ノ如シ、

孝明天皇祭 一月三十日

紀元節 二月十一日

春季皇靈祭 春分日

神武天皇祭 四月三日

秋季皇靈祭 秋分日

神嘗祭 十月十七日

天長節 十一月三日

新嘗祭 十一月廿三日

前学期試験後

二月廿二日より  
同月廿八日ニ至ル

夏季

八月一日ヨリ  
同月三十一日ニ至ル

歳末年始

十一月廿六日ヨリ  
一月七日ニ至ル

日曜

第十六條 小試業ハ毎月一次各課既読ノ書ニ就テ試験シ、平日ノ勤情表ト照準シテ座次ヲ改定ス、

但拔群ノ者ハ臨時昇級セシムルコトアルベシ、

第十七條 大試業ハ每学期ノ終リ之ヲ行ヒ、三級已上ハ一課若クハ二課未読ノ書ニ就テ試験シ、其他ハ既読ノ書ヲ試験シ、月次試験表ト照準シテ等級ヲ改定ス、

第十八條 試業ノ優劣ハ点数ヲ以テ評定シ、各二百ヲ最高点トシ六十点未満ノ者ハ落第トス、

第十九條 每学期得業及全科卒業ノモノニハ、第四号書式ノ証書ヲ授与スベシ、

第二十條 科用ノ書籍器具ハ生徒ノ自弁タルベシト雖、之ヲ購求スル力ナキモノハ貸付スベシ但シ本校所蔵品ニ限ル、

第廿一條 参考書若クハ科用外必読スベキ書ハ、書籍室ニ於テ閲覧スルコトヲ得ベシ、

第廿二條 学芸勉励品行方正ノ者、左ノ區別ニ従ヒ之ヲ褒賞ス、

一等賞

二等賞

三等賞

第廿三條 学芸怠惰品行方正ナラズ、若クハ校則ニ違犯スル者ハ、左ノ區別ニ従ヒ之ヲ懲罰ス、

責戒

禁足 三日以上  
三週間以下

放校

○第一号書式 用紙美濃紙四ツ切

入学願

私議御校へ入学志願ニ付試験ノ上、入塾  
通学御許可之程相願候也、

貫籍某 何男  
弟

年月日

苗字名㊦

何年何ヶ月

平安義校御中

履歷書

一 何年何月ヨリ何年何月迄何ヶ年間、何地何学校塾又ハ何某ニ就キ何学修業、  
一 得業書何々、

右之通候也、

年月日

苗字名㊦

○第二号書式 用紙大正奉書四ツ折

苗字名

今般試験ノ上、入塾  
通学ヲ許可ス、

年月日

平安義校㊧

○第三号書式 用紙 証書界紙

貫籍何某 何男 弟

苗字名

右今般 入塾 通学 御許可ニ付、御校則遵守学芸勉勵可為致ハ勿論、本人ニ関  
係ノ事件ハ一切私共引請其責ニ任ス可、依テ保証状如件、

住所番地  
貫籍

年月日

苗字名 ①

同 ①

平安義校御中

○第四号書式 用紙 第二号ニ同シ

得業  
卒業証

貫籍

苗字名

何年何ヶ月

本校 本科 第何級何期得業  
全科 卒業 ヲ証明ス

高等科 第何級何期得業  
全科 卒業

年月日 平安義校 ①

塾則

- 一 毎朝各室ヲ掃除スベシ、
- 一 来訪ノ客ハ室内ニ延クコト許サス、用談ハ応接ノ間ニ於テスベシ、
- 一 例刻教場ニ登リ各自ノ定席ニ就キ業ヲ受クベシ、教員ノ臨席退席

ニハ必ス敬礼ヲ行フベシ、

一 疾病事故アリテ教場ニ登リ難キ時ハ、其旨ヲ塾頭ニ告クベシ、

一 要用ノ外ハ他人ノ室ニ入ルコトヲ許サス、

一 休日ハ午前七時ヨリ午後七時迄外出ヲ許スベシ、  
但塾頭ニ跟從スルトキハ、一時若クハ二時間ヲ伸ルコトアルモ  
妨ゲナシ、

妨ゲナシ、

一 平日ハ不得已事故アルニ非サレバ外出ヲ許サズ、

一 放課時間塾頭ニ跟從シ、御苑内ヲ散歩スルコトアルベシ、

一 休日ニハ臨時健歩行ヲ催フスコトアルベシ、

一 事故アリテ下宿スルカ、又ハ塾外ニテ一泊スルトキハ、証人ノ証  
書ヲ理事ニ差出スベシ、

一 食堂ニ入ル時ハ各自ノ定席ニ就キ、食品卓上ニ備ハルヲ待チ、静

肅ニ之ヲ喫スベシ、

一 浴室ニ入ル時ハ喧噪ニ涉ラザル様注意スベシ、

一 教場又ハ他場所ニ於テ、生徒ノ姓名ヲ点呼スルトキハ、謹ミ之ニ  
答フベシ、

一 起臥ノ定期ハ夏季午前五時午後十時、冬季午前六時午後十一時ト  
ス、

ス、

一 夜中 十時  
後 音読ヲ許サズ、但静坐勉学スルハ妨ナシ、

一 臥床ニ就ク時、火鉢ノ火ヲ消シ灯火ヲ減スベシ、

一 科用ノ書籍器具ヲ借用スルニハ、其旨ヲ塾頭ニ告ケ許可ヲ受クベ  
シ、

一 教場ニ登リ又ハ門外ニ出ルトキハ、袴ヲ着ケ身体ヲ整フベシ、



- 一 剪髮剃鬚ハ浴室ノ側ラニテ為スベシ、
- 一 貨財衣服ノ貸借ヲ禁ス、
- 一 他人ノ履ヲ妄用スルコトヲ禁ス、
- 一 室中雑話ヲ禁ス、
- 一 飲酒ヲ禁ス、
- 一 近火若クハ非常ノ節、塾頭又ハ理事ノ指揮ニ從ヒ進退スベシ、
- 一 通學生ハ前各條ノ内、単ニ入塾生ニ係ルモノヲ除クノ外ハ、之ヲ守ルベキモノトス、
- 一 各自ニ起止簿ヲ作り、毎日其読ミ終リタル書目及卷數、又ハ動作ヲ記シ置クベシ、時アリテ塾頭ヨリ試問スベシ、

#### 生徒心得

- 一 忠孝ハ人倫ノ大本厚ク其旨ヲ体認スベキ事、
- 一 尊上ヲ敬シ卑幼ヲ慈シ朋友ニ信アルベキ事、
- 一 礼義ヲ重ンジ廉恥ヲ勵ミ、疎暴輕浮ノ行為アルヘカラザル事、
- 一 師長ノ教諭スル所ハ之ニ恭順シ、背戾スベカラザル事、
- 一 今日修業スル所ノ徳義學芸ハ、他日同郷子弟ノ模範ト為ルベキモノナレバ、宜ク夙夜自ラ強メ毫モ放縱儉安ノ心ヲ生スベカラサル事、
- 一 身体衣服居室ヲ清潔ニシ、眠食勞佚ヲ適度ニシ、健康ヲ保全シ、精神ヲ鋭敏ニスベキ事、

右本校生徒ノ必ス遵守スベキ者也、

#### 〔四〕「平安義校改正請求主意書」の翻刻

（表紙）

#### 平安義校改正請求主意書

平安義校ノ設立スルヤ、曩ニ 鳳駕車駐ノ後、京都住旧官家ノ輩方向ニ迷ヒ、子弟ノ教育行届カサルヲ以テ、諸公之ヲ慰顧シ、教育ノ道ヲ開カント欲スルニ由ル、而シテ事 宸聽ニ達シ忝ナクモ資金下賜ノ恩命アリ、又両大臣公ヨリ忠孝節義ノ道ヲ以テ、教育薰陶ス可キノ訓示ヲ下シ玉フ、武俊等素ヨリ教育ノコトヲ熱望ス、此恩賜ト此訓示ヲ伝聴スルニ及ンテ、感喜譬フルニ物ナク、殊ニ武俊モ本校理事ニ加ヘラル、コトヲ得タレハ、誓テ実學ヲ振興シ、邦家有用ノ真才ヲ鑄冶シテ、上ハ 朝恩ノ万一二酬ヒ、下ハ同輩ノ光榮ヲ世ニ明ラカナラシメント欲シ、再来專ラ意ヲ本校ノ盛衰ニ注キ、生徒ノ進歩ヲ望ムコト、恰モ農夫ノ稲秋ヲ待ツニ異ナラス、然而シテ本校設立ノ始メ忠孝節義ヲ教フルニ、經學ヲ以テシ之ヲ本校ノ教基トセリ、武俊熟ラ實際ノ教授ニ就テ、其得失ヲ考フルニ、教員句読ノ末ヲ追ヒ、註疏ヲ講明スルニ過キス、故ニ生徒ハ規模偏小知識短陋ニ陥ラントスルノ憂アリ、因テ謂ヘラク本校ノ教育終始此ノ如クンハ、生徒卒業ストモ何ノ用ニ供センヤト、諸公其迂闊ヲ察セルカ、客年五月ニ至リ更ニ両大臣ノ内命ヲ受ケ、干城ノ器ヲ養成スルノ目的ヲ定メ、校則ヲ修正シ改正趣意書ヲ送附セラル、此改正ハ真ニ忠孝節義ノ実効ヲ奏セシメントスルノ要道ニ

シテ、武俊カ宿憂ヲ消散シ、殊ニ武術ノ一課ハ己レカ分担タルヲ以テ頗ル之ヲ賛襄シ、益ス教授ノ完全ヲ求ム、如何セン文学負担ノ人、猶創立ノ始メノ教風ヲ変セス、改正ノ趣意ヲ遵行セサルモノ、如ク、其校務ニ至ツテモ無規律ヲ以テ之ヲ扱ヒ、迂闊ノ処置尤多シ、今其一端ヲ挙シニ、本校程期試験ハ毎年二月七月ノ二季ニ之ヲ行ヒ、生徒ノ等級ヲ定ムルコト、校則ノ如クナルヘキニ、開校以來本年二月ニ至ル迄、曾テ試験ヲ行ハス、本年二月始テ試験ヲ執行シタルモ、月ヲ閱スルニ及シテ及第落第ノ調査ヲ了ヘス、武俊屢ハ之ヲ促シ、終ニ一百日ヲ経テ其公示セシヲミル、然ルニ試験ノ法学課表ヲ堅押ニ行ヒシヲ以テ、何級生ト定ムルモノ一人ヲモ得ルコト能ハス、且其調査ノ疎漏ナルハ、甲乙同失アルヲ、甲ハ失点ヲ附シ乙ハ失点ヲ附セサル類、実ニ枚挙ニ遑アラス、抑モ本校ノ文学者ハ各程朱ノ学ヲ以テ得意トスレトモ、宋儒ノ学格物致知ノ窮理ニ氣質ノ性ノ判別ニ、愈ヨ解シテ愈ヨ窒礙シ、為ニ幾年ヲ費ヤスヲ知ラス、而シテ縦ヒ朱トナリ程トナルモ、未タ邦家ニ益スルヲミス、或人ノ曰宋儒有体而無用議論繁而実効少、縱使諸君子布滿朝端、亦不過議復井田封建而已、其於西夏北遼未必便有制馭之策也ト、能ク宋儒ノ弊ヲ論破セリト云フ可シ、夫本校生徒ノ淳朴ナルハ、猶是素絹ノ始メテ機ヲ脱スルカ如シ、其習染スル所口ニ随ヒ、將ニ諸色ヲ別タントス、今之ヲ紅色ニ染シコトヲ望ンテ、過テ黑色ノ汁壺ニ漬セハ、臍ヲ嚙ムトモ及ハス、本校望ム所口干城ノ器ヲ養成スルニ在ツテ、其道ク所口虚言空理ノ学ナリ、是紅ヲ望ミ黒ニ漬スニ非スヤ、武俊何ソ黙過シテ止ムコトヲ得ンヤ、窃按ルニ方今実学ノ振起シカタキヤ、其源三アリ、曰ク国体ヲ顧ミシテ他邦ノ学ニ心醉スル

ナリ、曰ク文武其道ヲ異ニスルナリ、曰ク時世ニ着眼セサルナリ、請試ニ之カ概略ヲ論セン、抑モ我邦ハ開闢以來 天祖ノ嚴訓アル有テ皇統連綿萬古一君ヲ奉シ、浩々タル神風一地球中ニ冠絶セリ、今若此国体ヲ顧リミス、他邦ノ学ニ心醉セハ、大聖至聖ト尊称スル彼孔丘ニ匹似ストモ、我國賊タルナリ、如何トナレハ彼孔丘ハ覲トシテ二君ニ仕フルヲ恥トセス、曰ク仕ヘサレハ義ナシト、況ンヤ孟軻ノ如キ独夫紂ヲ誅スルノ説ヲナスモノヲヤ、国民ノ嘗テ漢学ニ心醉スルモノ茲ニ顧ミル所ナク、彼土ヲ敬服羨望ノ余リ、或ハ彼ヲ中華ト称シ、或ハ祖宗ヲ吳太伯ノ子孫ナリト言ヒ、或ハ霸府ヲ 朝廷ニ比シ、甚シキニ至ツテハ、窃ニ禪讓ノ事ヲ議シタルモノアリ、況ヤ近來洋学ニ心醉スルモノ、弊害又更ニ多キヲヤ、是未タ国体ノ何タルヲ知ラスシテ、他邦ノ学ニ惑溺シ、他邦ノ虚文ニ眩迷スルナリ、果テ此ノ如クンハ、縱令博士碩儒トナルモ、邦家ノ用ニ供ス可カラス、故曰是実学ノ振起シカタキ源ナリト、天地ニ陰陽アリ、生靈ニ柔剛アリ、柔剛ハ文武ナリ、撥乱反正ノ功ハ武威ニ非ンハ能セス、守成治平ノ業ハ文德ニ非ンハ能セス、故ニ乱世ニハ武威ヲ先ニシテ文德ヲ忍レス、治世ニハ文德ヲ先ニシテ武備ヲ忽ニセス、治乱互ニ文武ヲ用ヒ、太平至治ノ効ヲ成スハ、猶陰陽ニ氣ノ互ニ其根底ヲ交ヘ寒暑昼夜ヲナシ、万物ヲ化育スルカコトキナリ、是天地ノ定理ニシテ古今万国未タ文武ヲ偏廢シテ、能ク治平ヲナスモノナシ、只孔丘ハ曾テ斯文ト唱ヘテ斯武ト云ハス、衛公陣ヲ問ヘハ俎豆ノ事嘗テ之ヲ学ヘリ、軍旅ノコト未タ之ヲ学ハスト、対ヘテ明日其国ヲ去リ又孟軻ハ能ク戰モノ上刑ニ服スト云フ、是以テ和漢二千年來幾千萬ノ儒者ハ、専ラ文教ノミヲ主張シ、之ヲ先王ノ道ト

称シ、武事ハ武人ノ道ト心得、遂ニ判然二道ニ別レ、文人ハ武夫ノ驍  
駿ヲ嘲ケリ、武夫ハ文人ノ恇怯ヲ侮トリ、水火相容レサルニ至ル、安  
石曰ク先王之時士之所學者文武之道也、士之才有可以爲公卿大夫有可  
以爲士其才之大小宜不宜則有矣、至於武事則隨其才之大小未有不學者  
也、故其大者居則爲六官之卿出則爲六軍之將也ト、漢土三代ノ世曾テ  
文武ヲ異ニセサルヤ、即チ安石カ説ノ如クニシテ孔孟始メテ之ヲ異ニ  
ス、夫我邦瓊茅ノ礮馭ヲ画キ、宝劍ノ妖魅ヲ除キシヨリ以來、瓊尊  
ノ下土ニ降臨セシトキ、齋主健雷ハ戈ヲ執テ先驅ト爲リ、天忍日大來  
目ハ弓矢ヲ提テ扶翼ト爲リ、以テ不順ヲ征伐シ、神武ハ長体彦ヲ戮  
シテ万世ノ宗トナリ、崇神ハ四將ヲ立テ四方ニ化ニ懷カシメ、景行  
ハ日本武ニ委シテ戎夷ヲ誅シ、神后ハ武内高良ヲ師ヒテ三韓ニ貢ヲ  
納レシメ、鎌子ハ入鹿ノ暴夷ヲ殄チ、東人ハ広嗣カ乱ヲ撥ヒ、菟田船長  
ハ押勝カ横ヲ殲シ、田村ハ東夷ノ靈ヲ鎮メ、綿磨ハ仲成カ軍ヲ破リ、  
利仁ハ高丸カ窟ヲ屠リ、將門ノ東州ニ叛スルヤ、忠文経基師ヲ出シ、  
貞盛秀郷其首ヲ得タリ、純友ノ南海ニ寇スルヤ、好古兵ヲ董シ遠保其  
身ヲ縛ス、惡鬼羅城ニ棲ムヤ、頼光之ヲ斬リ、忠常海隅ニ抛ルヤ、頼  
信之ヲ梟シ、貞任宗任ノ河堰ヲ守ルヤ、頼義之ヲ拔キ、武衡家衡ノ金  
沢ニ壘スルヤ、義家之ヲ鑿ニス、義親カ雲州ニ逆スルヤ、正盛攻テ之  
ニ克チ、奈良ノ桑門 帝闕ヲ侵スヤ、爲義撃テ之ヲ走ラシム、此等ノ  
武功ハ古昔王政未タ衰ヘサルノ日ニ当リ、国祚ヲ固フシ、皇統ヲ保  
ンスルノ著明ナル所ニシテ、王室一タヒ斯武ヲ失ヒ、大権武士ニ移  
ルノ後モ、北條氏ノ外使ヲ斬ルアリ、豊臣氏ノ朝鮮ヲ屠ルアリ、共ニ  
我国威ヲ海外ニ輝カスモノハ武ナリ、且乱世ノ間人尽トク尊王ノ道ヲ

知ラスト雖トモ、只能廉恥ヲ重シテ死ヲ見ルコト、歸ルカ如キハ武  
ナリ、近世大義名分ヲ正スノ学、人心ヲ感覺スルヤ、直ニ之ヲ断行シ  
テ、能ク維新ノ大業ヲナスモノ武徳ニ因ルナリ、維新ノ後能旧弊ヲ断  
去シ、此開明ニ赴クモノ武徳ニ因ルナリ、今ヤ国威ヲ東洋ニ振ヒ、能  
強國ト対立スルモノ武徳ニ因ルナリ、宜哉國ノ美称ヲ細戈千足ト号シ、  
人ノ美称ヲ武士ト云フコト、然ルニ斯武ヲ賤シンスル學者ヲシテ子弟  
ノ教授ヲ任セシメハ、惡ソ本邦実用ノ真才ヲ得ン故、曰ク是実学ノ振  
起シカタキ源ナリト、武俊近コロ世界ノ大勢ヲ熟觀スルニ、西洋各国  
ノ開明日月ニ進歩シ、我同盟ノ帝國廿余治績唐虞ニ超拔スルアリ、学  
士孔孟ニ秀越スルアリ、兵略孫呉ヲ折挫スルアリ、宗教釈氏ヲ压倒ス  
ルアリ、刑法申韓ヲ誥屈スルアリ、良医華偏ヲ服従スルアリ、農工  
ニ商ニ学アラサルハナク、啞二盲二聾ニ学ハサルハナク、天文地理ハ  
考測ヲ究メ、物理生理ハ蘊奧ヲ闢キ、水理礦山其利ヲ尽シ、牧畜耕漁  
其益ヲ広フシ、国富ミ家榮ヘ風俗善良衛生完全居則石室層樓ノ雄麗ヲ  
競ヒ、行ケハ則幽林芳苑ノ瞻眺ヲ縱マ、ニス、金銀玻璃ノ光彩ハ大陽  
ニ輝耀シ、石油瓦斯ノ光明ハ暗夜ニ路傍ヲ偏照シ、汽船ハ各港ニ去來  
ヲ絶タス、汽車ハ定時ニ人物ヲ往復シ、電信ハ瞬間ニ万国ノ語ヲ伝ヘ、  
万里ノ需メ応セサルナク、世界ノ情通セサルナシ、才学アルモノ以テ  
相將ニ昇ルヘク、以テ勲功ヲ建ツヘク、以テ名譽ヲ策ス可シ、金力ア  
ルモノ以テ王侯ニ交ル可ク、以テ世界ヲ巡遊スヘク、以テ快樂ヲ極ム  
可シ、自由ノ信ス可キハ擊壤ノ民ヲ冷笑シ、博施ノ及フ所堯舜ヲシテ  
疾マシメス、是古昔聰明叡知ノ聖人スラ、夢相スルコト能ハサリシ、  
文明ニシテ仏家ノ謂ハユル極樂世界モ亦、恐ラクハ茲ニ及ハサラン、

大勢ノ変化実ニ驚ク可シ、而テ其列國ノ雄傑ナルモノハナリ英ナリ魯ナリ李ナリ各強兵百万ヲ擁シ、軍艦武器ハ其利ヲ極メ、軍資軍糧其積ヲ高フシ、弱ヲ襲ヒ衰ヲ薨シ、其國境ヲ占領シテ、自ラ版圖ヲ廣大ニス、中ニ就テ魯ハ其祖先ノ遺志ヲ継キ、常ニ五大洲ヲ一統セントスルノ意アルコト、世界ノ普ネク偵知スル所ニシテ、我北海道ハ之ニ接セリ、夫我邦ハ東海ノ嶋嶼ニシテ、彼強國ノ版圖ニ比スレハ、徒ニ百分ノ小ノミナラス、陸海軍モ亦未タ二十万ニ及ハス、而シテ能此世界ニ獨立シ、敢テ強國ノ侵辱ヲ受ケサルモノ、果シテ何ノ故ニ因レルヤ、曰ク彼カ開明ニ後レサレハナリ、我真武ノ顯揚スレハナリ、彼支那印度ノ卑怯ヲミスヤ、其土地人口ノ盛ンナルハ五大洲中ノ上位ニ居ナカラ、歳々版圖ヲ蚕食セラレ、時々ニ償金ヲ要求セラレ、毎ニ世上ノ笑柄トナル、是他ナシ、旧俗ヲ脱シテ開明ニ赴クコトヲ能セサレハナリ、文弱ニ流レテ廉恥ノ心ヲ失ヘハナリ、世界ノ大勢彼我ノ關係洵トニ如此ニシテ、旧学ヲ固守スルモノ、毫モ時勢ヲ顧リミス、国学家ハ神德ノ稱賛ニ訓古ノ考証ニ和歌ノ誦詠ニ禁厭ノ祈禱ニ其専門ヲ分チ、漢学家ハ經註ノ穿鑿ニ歴史ノ涉獵ニ詩賦ノ吟詠ニ文章ノ摘藻ニ又其専門ヲ分チ、各喜フ所ヲ以テ天下ヲ變セント欲ス、殊ニ知ラスヤ、此等ノ学縦令集メテ大成ストモ、終ニ東洋ノ一学課ニ過キサルヲ、況ヤ真才ヲ得ルニ於テヤ、故曰是実学ノ振起シカタキ源ナリト、然レハ則今日ノ学宜ク是等ノ弊根ヲ棄絶シ、本末ヲ明カニセンハアルヘカラス、文武ヲ兼スンハアル可カラス、時勢ニ通セスンハアル可カラス、武俊因テ真才養成ノ道ヲ熟考スルニ、本年公布ノ士官生徒入学検査、格例ニ検査ヲ分テ四則トス、第一則年齢、第二則体格、第三則読書作文、第

四則算学、年齢ハ十八年以上二十三年以下、身体ハ強壯身幹五尺以上、読書ハ唐宋八大家文<sup>(古文)</sup>、作文ハ政記外史ニ載スル人物論<sup>(真名)</sup>、算学ハ一元一次方程式一元二次方程式ニシテ、右四則ノ外、地学<sup>(天体部)</sup>、画学<sup>(草部)</sup>、体操<sup>(器械)</sup>、乗馬ノ検査ヲ請フ者アラハ之ヲ許シ、若干ノ点数ヲ与フトアリテ、之ニ応セシムルノ学力ハ、固ヨリ養成シカタキニ非ス、然ルニ真ニ忠孝節義ノ実効ヲ奏セシメント欲セハ、徒ニ之ヲ入学セシムル迄ノ学力ニ止ム可カラス、修身講セスンハアル可カラス、武勇養ハスンハアル可カラス、物理生理知ラスンハアル可カラス、語学モ亦学ハスンハアル可カラス、而シテ最モ養正ニ苦シムモノハ体格ナリ、如何トナレハ身体不合格ノモノハ学力ノ有無ヲ問ハスシテ、及第スルコト能ハサレハナリ、曩ニ軍医ノ現行スル体格検査規則及内規ヲ一見スルニ、不合格ノ病名痼疾頗ル多シ、例セハ胸囲身幹ノ半尺ニ滿タサルモノ、齶齒四箇以上ノモノ、咽喉ニ桃腺アルモノ、痔血アルモノ、臍肉扁平ナルモノ、類トス、故ニ縦令武官就職ノ志ヲ固フシ、数年ノ学課ヲ卒ルモ、其検査ヲ受ルニ至リ、身体ノ不合格ヲ以テ落第セハ、其失意如何ソヤ、武俊頗ル茲ニ憂慮シ、頃日武官就職ヲ望ム生徒ノ父兄ニ論シ、略ホ其検査法ニ熟スル医師ヲ乞テ、予シメ体格ノ試験ヲ遂ケシニ、生徒六拾一名ノ内、甲種<sup>合格</sup>一拾二名ニ過キス、乙種<sup>商業養成ニヨリ合格スルノ見込アルモノ</sup>三拾三名、丙種<sup>合格ヲ見込ニシキモノ</sup>八名、不合格者六名、即今種類判別シカタキモノ二名トス、夫乙種以上ハ之ヲ養成スルニ、体操ト摂生ヲ以テスレハ、概ネ合格ノ見込アルモ、其他ハ目的ヲ達シ難ク、又副科ニ在テ武官就職ヲ望マサルモノ数十名アリ、故ニ落第者及副科ノ為メ、殊ニ学課ノ全備ヲ欲ス、如何トナレハ士官タル能ハサルモノニ



在テモ、時勢ニ後レサラシメンカ為メナリ、学課改正ノコト曾テ内議アルヲ聞ク、然レトモ猶未タ発付ヲ得ス、因テ武俊猥リニ意見ヲ吐露シ、学資ノ定額ニ基キ、改正案及学課表日課表検査規則等ヲ起草ス、而シテ厳定セスンハアルヘカサルモノハ、職制ナリ諸規則ナリ、職制立ツテ主権者能ク国体ヲ明カシ、文武ニ偏セス時勢ニ後レス、自ラ本校ノ盛衰ニ任シ、学課ヲ断行ス可ク方向ヲ一定ス可シ、諸規則成テ衆務整ヒ百事挙ラン、因テ又職制案及校員ノ席次分課月計予算日課表等ヲ草シ、併セテ之ヲ参考ニ供ス、若夫今日ノ授業ノ如ク、糟醜芻狗ノ空論ヲ以テ、固陋寡聞ノ人ヲ作り、我固有ノ武勇ニ換ルニ、彼文弱ヲ以テセントシ、無規則ヲ以テ得意トスルカコトキハ、武俊カ知ル所ロニ非ルナリ、冀ハクハ深察セヨ、頓首頓首、

明治十八年八月

中川武俊敬白

從三位柳原前光殿

從四位伊丹重賢殿

正五位尾崎三良殿

從五位桜井能監殿印

おわりに

本稿で翻刻・紹介した史料から、あらたに得られた平安義校に関する知見を整理することで、結びとしたい。

(一)の「平安義校設立方法」第一款の「平安校設立ノ目的」や、第八款の「教員職務及其学力」を見る限り、「忠孝節義」を基本とする

理念や、「和漢ノ文学」を基礎に据えた科目構成は、(三)の開校当初の「平安義校規則」第一條や第十一條にそのまま反映されており、平安義校が当初の設立の目的に沿って開校されたことが確認できる。また、第二款から、常磐井殿町の旧二条邸が平安義校の本校とされたのとは別に、かつて産業誘導社が置かれていた玄武町に、入塾生の寮としての塾舎が存在したことも判明する。

(二)の「明治元年復古ノ際ヨリ同十三年迄ノ学校ニ関スル布達ノ控」の前半では、明治元年(一八六八)に「大学校」建設の方針が示されると、同年九月に「皇学所」「漢学所」が京都に仮設され、宮堂上・非蔵人・諸官人等の官家士族の入学が認められたこと、漢学・洋学が皇道の羽翼(補佐)と位置づけられたこと、同年十二月には皇学(国学)を盛んにするよう奨励されたことや、同年六月に昌平学校(旧幕府の昌平坂学問所)が復興されたこと、翌明治二年(一八六九)四月には昌平学校の定日の講義に、東京在住の公卿・諸侯・諸大夫・諸官人・非蔵人等の出席が認められたことなどが記載され、こうした教育のあり方に好意が寄せられている。なお、「皇学所」「漢学所」は、明治二年十二月に設立された「仮大学校」の前身である。

同史料の後半では、明治四年(一八七二)十二月以来の西洋の教育制度を模倣した実学主義や、明治五年(一八七三)三月の「私学校迄モ洋風ニ変スル之布達」などに対して、強い反感が示されている。また、明治十三年(一八八〇)の文部省の職制改正に触れ、文部卿の職務として「道德智識ノ上進」が明記されたことに関心を寄せている。これらには、明治四年十二月に文部省が洋学者を中心として学制の起

草を始めさせ、明治五年八月に欧米の個人主義や実学主義を基調とする学制が公布されたことに対する反感や、明治十二年（一八七九）の実学より道德を優先すべきことを強調した教学大旨、および修身を重視した明治十三年の改正教育令に対する期待感なども、暗示されていると捉えられよう。

（三）の「平安義校規則」については、明治十七年（一八八四）初め頃の開校当初の規則である（Ⅱ）のみを全編にわたって翻刻したが、ここでは一の第二節で一部を翻刻した（Ⅴ）の明治十七年四月以降に改正された規則、（Ⅳ）の明治十九年（一八八六）九月改正の規則、（Ⅲ）の明治二十三年（一八九〇）九月改正の規則、および、（四）の「平安義校改正請求主意書」をあわせて検討し、これらから確認できる事実を整理しておきたい。

まず開校当初の（Ⅱ）の規則では、「第一條 忠孝節義ノ道ヲ講明シ、開物成務ノ業ヲ研究スル」ことを教育の目的とし、「（第十一條）修身、歴史、文章、習字、算術、体操、唱歌」を教科に定めているが、明治十七年四月以降改正の（Ⅴ）の規則では、あらたに「（第一條）文学武伎ヲ研究スル」ことが教育の目的に加えられ、「（第三條）陸軍士官タル志願スル者」を対象とした本科と、その他の副科に教則が分けられており、また、科目から唱歌が除かれ「（第十一條）図画」が加えられている。開校から間もない明治十七年四月には、すでに「陸軍士官タル志願スル者」を養成するといった、現実的な教育の目的を設定する必要に迫られたことがうかがえる。

さらに、明治十九年改正の（Ⅳ）の規則では、こうした現実的な教

育目的が、「行誼ヲ修整シ、文学武伎ヲ研究セシメ、生徒中体格強壯ナルモノハ、陸軍士官生徒ノ試験ニ応シ、体格健全ナラサルモノハ、各高等学校ニ入学スルノ準備ヲ為サシムル」のように第一條で明確に定められ、科目もこれに対応して、「（第四條）予科ハ修身、読書、作文、英語、地理、歴史、算数、博物、物理、習字、図画及ヒ体操」（第五條）本科ハ倫理、国語、漢文、英語、独逸語、地理、歴史、算数、代数、幾何、三角、博物、々理、化学、簿記、習字、図画及ヒ体操「但体操ハ操練、擊劍及ヒ輕体操トシ、課余ニ水泳、馬術、弓術ヲ習ハシム」と大幅に修正されている。先述の小林丈広氏が紹介した『浜岡光哲翁七十七年史』の記事のうち、「藩閥政府の武力に対抗し、之を禁衛軍として宮中に直属せしめ、薩長の専恣を控制せむとするの意図を有したる」との証言についてはさすがに言い過ぎとしても、「当初岩倉右府公は、京都士族の子弟に尽く軍事教育を施」そうとの考えを有していた可能性は、あながち絵空事と言えないかもしれない。

さて、こうした現実的な教育目的が導入された事情については、明治十八年（一八八五）八月に、中川武俊が記した長文の「平安義校改正請求主意書」で詳しく述べられている。中川は、開校当初の教育について、「忠孝節義ヲ教フルニ、（中略）教員句読ノ末ヲ追ヒ、註疏ヲ講明スルニ過キス、（中略）本校ノ教育終始此ノ如クシハ、生徒卒業ストモ何ノ用ニ供センヤ」のようにこれを痛烈に批判し、「実学ヲ振興シ、邦家有用ノ真才ヲ鑄治」することを望んでいる。そして、これを具現化した教育の目的こそが、「干城ノ器ヲ養成スル」こと、すなわち天皇や国家を守る軍人を養成することであり、「客年（明治十七年）五月ニ



至り更ニ兩大臣ノ内命ヲ受ケ」てこの目的を定め、「校則ヲ修正シ改正趣意書ヲ送附」したにもかかわらず、「如何セン文学負担ノ人、猶創立ノ始メノ教風ヲ変セス、改正ノ趣意ヲ遵行セサルモノ、如ク、其校務ニ至ツテモ無規律ヲ以テ之ヲ扱ヒ、迂闊ノ処置尤多」い状況であると、これを嘆いている。

また、こうした「実学ノ振起シカタキ」原因として、「曰ク国体ヲ顧ミスシテ他邦ノ学ニ心酔スルナリ、曰ク文武其道ヲ異ニスルナリ、曰ク時世ニ着眼セサルナリ」という三つの問題を指摘し、「然レハ則今日ノ学宜ク是等ノ弊根ヲ棄絶シ、本末ヲ明カニセンハアルヘカラス、文武ヲ兼スンハアル可カラス、時勢ニ通セスンハアル可カラス」と、これらを克服すべきことを説いている。そして、「本年公布ノ士官生徒入学検査」の項目を分析した上で、「之ニ応セシムルノ学力ハ、固ヨリ養成シカタキニ非ス」とし、さらに、「真ニ忠孝節義ノ実効ヲ奏セシメント欲」するならば、これらに加えて「修身講セスンハアル可カラス、武勇養ハスンハアル可カラス、物理生理知ラスンハアル可カラス、語学モ亦学ハスンハアル可カラス」と主張するとともに、「最モ養正ニ苦シムモノハ体格」であるので、「身体不合格ノモノ」や「武官就職ヲ望マサルモノ」への対応として、「落第者及副科ノ為メ」「如何トナレハ士官タル能ハサルモノニ在テモ、時勢ニ後レサラシメンカ為メ」に、「殊ニ学課ノ全備ヲ欲ス」と科目改定の必要性を訴えているのである。

明治十九年（一八八六）改正の（Ⅳ）の規則を見る限り、明治十八年八月の中川による要求が、ほぼ全面的に反映された内容となっていることは明らかである。先述の小林氏が引用した明治二十一年

（一八八八）九月の『日出新聞』の記事からうかがえるとおり、この頃の平安義校は、たしかに規則の上では「欧米の新学問」も取り入れた「実学」的な教育目的が掲げられ、そうした科目も設定されていたのである。教頭で漢学者の西尾為忠と中川武俊らの対立は、こうした状況下で惹起した問題であったことが、ここから確認できよう。

明治二十三年（一八九〇）改正の（Ⅲ）の規則でも、「（第一條）陸海軍学校及高等中学校ニ入学スル生徒ヲ養成シ、徒ニ生徒ノミナラス、大ニ德育体育ニ注意シ、国家有用ノ才ヲ陶冶センコト」を教育の目的に掲げており、科目も「（第六條）道義、体操、国文、漢文、地理、歴史、習字、英語、数学、博物、物理、化学、図画」のように、明治十九年改正の（Ⅳ）の規則より多少の簡素化が図られているものの、その枠組みはほとんど変更されていないのである。

ところで、はじめに紹介した『平安義会事歴』所収の「平安義校規則」は、第一條から第三條あたりまでは、開校当初の（Ⅱ）の規則に類似しており、これに若干の手を加えたもののようであるが、たとえば第四條の科目が「皇典 漢籍 経史 文章」となっていることなどは、実際に定められたどの規則とも合致しておらず、『平安義会事歴』編纂時点での改竄と考えられる。また、『平安義会事歴』には、明治十七年（一八八四）一月の「本義校建設ノ際、建校大意ヲ官家士族一般ニ発布シタリ」として、「建校大意」なる文章が掲載されているが、少なくとも本稿で検討した膨大な分量に及ぶ『平安義会資料』所収「由緒沿革誌 其ノ四 平安義校ニ関スル書類」のなかには、これに該当しそうな書類はいっさい綴られていなかった。これによってただちに「建

校大意」そのものの存在を否定することはできないが、非常に疑問の残る史料であることは指摘できよう。

さて、『平安義会事歴』では「建校大意」の引用直後に、「是レ有栖川宮及三條公御訓諭ノ主旨ヲ敷演シタルモノニシテ、専ラ忠孝節義ノ道ヲ以テ励精薫陶シタリ」と記されているとおり、そこには平安義校が開校当初より一貫して復古主義的な教育を施していた印象を抱かせようとの強い意図が感じられるものの、実際には中川武俊が主張する実学的な教育目的が、開校間もない段階から導入されていた。にもかかわらず、こうした点について先の文章の続きでは、「当時或ハ固陋ノ弊ニ陥ラサル哉ノ論モアリシガ」の一言で、中川らの取り組みは片付けられてしまっているのである。さらには「明治二十三年ニ至リ、万古不拔ノ教育勅語ヲ煥発セラレタリ、之レヲ捧読スルニ至ツテ義校ノ精神ノ誤ラサルコトヲ認メ、大ニ人意ヲ強フスルコトヲ得タリ」と続けられているように、平安義校が明治十七年の開校当初より、後の教育勅語の精神を先取りしていたとのアピールがなされている。

以上のように、明治四十一年（一九〇八）十一月に編纂された『平安義会事歴』には、すでに廃止されていた平安義校を、教育勅語の精神に通ずる復古主義的な教育を首尾一貫して取り入れていた学校として、後世に伝えようとする意図が、露骨に現れているのである。ただし、中川武俊が取り入れさせた実学的な教育については、明治二十一年（一八八八）の西尾為忠との論争や、明治二十六年（一八九三）に平安義校の廃止が決定されたという事実にもられるとおり、実際にはうまく機能しなかったものと思われる。中川のように、当初は復古主

義的な教育を望んでいたものの、現実に学校を運営するなかで、何とかこれを実学的な教育と折り合わせようと努める者が存在したにもかかわらず、結果的に平安義校がきわめて短期間のうちに廃止されてしまった要因については、あらためてその経緯を追究していきたいと考えている。

## 注

（１）すでに、「平安義会沿革概略」の翻刻と官家士族の先行研究―『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介（二）―」（駒沢女子大学研究紀要）二四、二〇一七年）を発表している。あわせて参照されたい。

（２）山下奈津美「平安義会のあゆみ―二條家と同志社をつなぐもの―」（『同志社大学歴史資料館館報』一一、二〇〇八年）。

（３）『平安義会事歴 全』（平安義会、一九〇八年）。なお、同資料は京都府立京都学・歴史館をはじめ、いくつかの図書館などで所蔵されている。

（４）小林丈広『明治維新と京都―公家社会の解体―』（臨川書店、一九九八年）。

（５）『尾崎三良自叙略伝 上・中・下巻』（中央公論社、一九七六―七七年）。

（６）注（一）拙稿参照のこと。